とある奇跡の能力共有

夕月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある奇跡の能力共有

【Ｎコード】

Ｎ０５３３Ｌ

【作者名】

夕月

【あらすじ】

能力共有（シンパシー）という検査上、完全なレベル０の能力を持つ、少女、睦月優奈とその仲間たちの物語。

更新速度はかなり遅いと思いますのでご注意ください。

7月31日

科学と魔法が交差するこの学園都市。
超電磁砲（レールガン）、禁書目録（インデックス）の裏で行われていた、とあるレベル0（無能力者）からレベル3（良能力者）の物語。

「う～ん」
優奈は頭を抱えた。
「夏休みの宿題が終わらないのね……」
独り言をつぶやく。
彼女の目の前にはたくさんの宿題が並んでいた。
現在日時及び時刻7月31日午後7時12分。
おとといからラッシュをかけているのにもかかわらず、この量である。
「あああ～。これだったらトップ校を狙うんじゃなかったのね～」
二時間ぶっ続けで机に向かい、宿題と格闘していたのにもかかわらずいまだに宿題は終わらず。
自分の住む寮の部屋には優奈一人しかいない。
別に一人で住んでいて、困ったことはないが、こういうときには非常にこまる。
「近くに友達がいれば、シンパシーでわかるんだけどのね～」
ぼふっと布団に倒れこんだ。
「う～ん……頭冷やしにコンビニでも行くのね……」
むっくりと起き上がって、ふらふらと玄関に向かった。
「財布……財布……と」
鞄から財布を取り出して、小銭袋に100円玉数枚を入れ、玄関の扉を開けた。
少し、冷たい空気が顔にあたった。

7月31日（後書き）

初めて、投稿する作者です。
時間的には一方通行（アクサラレータ）が打ち止（ラストオーダー）めを救おうと奔走し、その場所に向かっている時間あたりが始まりです。

登場人物紹介
睦月優奈
完全なレベル（虚数レベル）0の能力（シンパシー）共有。
体は比較的小柄。ゆえに胴体中央から上の部分の発育は進んでいない。

言葉紹介
虚数レベル
完全なレベル0に対して付けられる“予定”のもの。
具体的にはのちに。

能力共有（シンパシー）の応用

優奈は一人で歩く時、特に夜は常にシンパシーを発動している。
少し前にスキルアウトによる能力者狩りがあったためでもある。
これといって、攻撃能力を持たないシンパシーは無能力者相手だと相手の思考を読んでかわすことしかできないからだ。
だから、常に張り巡らすことで、その危険から身を守っている……ということだ。
「ぷはー」
コンビニで買ったレモンティーのココナッツミルクオレとかいうのを飲んでいた。
「結構、おいしいのね」
コンビニの近くの公園で飲んでいた。
奇妙な飲み物が多い、この学園都市のなかでも意外と普通なものもあるのね～と優奈は考えていた。
ふと、公園の外を見てみると、肌と髪が白い性別が判別しにくい人が血相を変えて走って行った。
「……あれは……レベル５の一方通行（アクセラレータ）？」
優奈は首を貸すげる。
「ま、かかわらないのが身のためなのね」
一方通行といえば、学園で七人しかいないレベル５のうち第一位と呼ばれる人だ。
もっとも、先日、自称レベル０の学園七不思議のひとつ、能力をすべて打ち消す力を持つ人に負けたらしい。
「……？」
常に、シンパシーを使用している優奈は微弱ながら彼……というべきか……の思考を読み取った。
「あれ？おかしいのね？打ち止め（ラストオーダー）ってなにになのね？」

優奈はまた首をかしげた。
「んーっと、確か明日の午前零時になるまでに、打ち止めを見つけて、えーっとだれだっけ？まあいいや、その方を捕まえて、暴走プログラムを解除？どういうことなのね？」
少し、疑問にもつが、
「あ、忘れかけてたのね！宿題！」
偶然一致（シンクロニティ）の所為か、優奈も明日の午前零時の宿題終了を目標にしていたのだ。
優奈はダッシュで公園を飛び出した。少し古びた研究所の近くを通った時、パンという音が轟いた。
驚いて、振り向いた。
いつもは締まっているはずの研究所の前のゲートが開いていた。
「なんなのね？」
ゆっくり近づくと、もう一度パンと乾いた音がした。
「ひっ！」
優奈は悲鳴を上げた。
そして、シンパシーの応用を使いつつ、ゆっくりのぞいてみると、三人が倒れていた。
「あわわわわわわわ……」
突然のことに優奈はあわてた。
優奈が次に気がついた場所は、自分の寮の前だった。
いまさらだが、寮といってもアパートに近い。２ＬＤＫトイレ、風呂付でそれなりの
生活はできる。
一応、自分の携帯をのぞいてみると、リダイアル記録はなかった。
「ふうぅ」
自分の部屋に入って、一息ついた。
「……あ、宿題が残ってるのね」
ゆっくりと起き上がって、机に向かった。

現在時刻午後８：１２分。
優奈の宿題は明日の午前０：００までに終わるのか！？

能力共有（シンパシー）の応用（後書き）

一方通行さんが出てきましたが、いまだに他のキャラは出てきません。
いうのを忘れていましたが、この物語には基本的にオリキャラしか出てきません。
まれに、黒子や初春はだすつもりですが、超電磁砲や幻想殺しは基本的に出しません。やっぱりクライマックスでの登場でしょうかね。

用語解説
能力共有の応用
簡単にい言えば相手の思考を読み取ること。
詳しく言うと、能力共有の際、相手の脳波に自らの脳波を合わせ、その相手の能力を使用する。ゆえに、そのまま能力を発動しないままであれば、長時間にわたって相手の思考を読み取ることは可能。
むろん、リスクは高い。

偽造電磁砲（コイルガン）と幻想投影（ホノグラフ）

結論からいってしまおう。
無理だった。
午前零時には残念ながら終わらなかった。
それでも、午前２：３０までにすべての宿題を終えたのは奇跡だった。
「……ふぁぁぁぁぁぁ……」
眠そうなあくびをしながらの登校だった。
「ウィーッス、優奈」
「涼香ちゃん」
「眠そうだねぇ―？」
ふふふんと鼻歌を歌いながら、早稲涼香が優奈の隣についた。
「なんとかおわったのね～」
優奈がぐたーとなりながら、言った。
「でもさ、優奈よくあの学校に行く、とかいったよね」
「うん、まあね。できるだけ高いところをまざしてって思ったのね」
めをしばしばさせながら言った。
「……まあ、試験の際にはシンパシーの応用っていう裏技もあるしね」
早稲がぼそっと言った。
「……どれができたらどんだけいいことか」
少し肩を落としつつ言った。
ふうと、優奈はため息をついた。
なぜなら、試験の時、一度もシンパシーの応用（チート）を行っていないからだ。
こういうところは律義なのである。
優奈の頭の中の片隅には昨日のアクセラレータのことがあった。

が、彼女は気にしないことにした。
前に介入してひどい目に会ってるからだった。
「……ところで宿題終わった？」
「ふふふ。私が宿題を終わらせられると思っているのかい？優奈ちゃんは」
「全く思っていないのね」
「ああん、ひどい～。確かに、終わってないけど～」
「……通行人の目を引くからやめてほしいのね」
べったり引っ付いてくる涼香を優奈は一生懸命はがそうとした。
「百合百合でいいじゃ～ん」
「いやなのねぇ～。離すのね～」
突然、がんという音とともに涼香が後ろ向きに倒れた。
「ア、アルミ缶？」
「大丈夫？」
脇の道から入ってきた冬峯末明の電磁加速砲で加速されたアルミ缶が涼香の頭を直

撃したのだ。
優奈は体が小さいから、ギリギリでかわしたのだった。
きゅううううと伸びている涼香を見ながら、
「そろそろ先に行かないと、始業に遅れるよ？」
「あ、そうだったのね。でも……」
「あんた律義ねぇ……仕方ない」
末明は電撃を涼香に打ち込んだ。
「にぎゃ！」
と言って涼香が起き上がった。
「おはよう。早く行かないと始業に遅れるよ？」
「ん！そうだね！」
「……打って変ってでいろんな意味で怖いのね」
と優奈はボソっとつぶやいた後、走って行った二人を追いかけた。

＊　＊　＊

その日の放課後。
「やーっと終わったね」
涼香がのびーっとする。
「今日のは特に長かったのね。二一分三二秒もかかったのね」
「計ってたの？」
優奈が正確な時間を出すから末明は驚いた。
末明と優奈はつい最近出会ったばかりだから、優奈のことをよく知らないのだ。
「たぶんなのね」
「たぶんて……」
末明は信頼できそうにないなと思っていたら、
「二一分なのは本当だけどね」
「まじ？」
「分単位までなら、確かに正確にわかるのね」
末明はどこまでが本当でどこからが嘘なのか分からなくなってしまった。
優奈は長年付き合っていないとよくわからない人間なのだ。
で、この学園都市の中で最も長い付き合いなのが涼香だった。
「……どっから、本気でどっから嘘なのかはっきりしてぇ……」
「ハッキリしてるんつもりなんだけどね～。さっきのは２１分以降は嘘なのね」
「そうそう」
優奈の言葉に相槌を打つ涼香はすごいといえるだろう。
「……んで、なんで、銀行に行くのね？」
「だって、銀行強盗って結構ベタじゃない？」
「……それ期待しているの？」
優奈と涼香はため息をついた。

一応、末明は風紀委員（ジャッチメント）なのだ。ただし、今まで一度も検挙したことがない。
だから、こういえるのだ。
もっとも、優奈と涼香の能力が使えること前提だから、二人を連れてきているのだ
が。
「一応、それ以外もあるんだけどね」
「ほえ？」
「ま、普通の銀行振り込みよ」
と言って末明は窓口に向かった。
一応ながら学園都市だと振り込みはインターネットでできる。
だけど、末明はこうやっていちいち銀行の窓口まで来て、やっている。
「さて、終了ね」
小２０分ほどで振り込みは終わった。
「で、末明はどうするの？」
「ん？ジャッチメントの仕事があるからねぇ……」
「そうだったのね。すっかり忘れてたのね」
優奈が少しあわてた。
「優奈ちゃん……。あなた、素は忘れ物ひどいでしょ？」
「ぎくっ」
「図星ね」
「……はいなのね」
確かに優奈はよく物事を忘れやすい。
だけど、他の人よりものを覚えるのは早い。
……華麗に左から右に行っている可能性は否定できないけど。
「さてっと……」
優奈と涼香が座っていたベンチを立った。

このアングルでみると確かに優奈は小さい。
優奈の頭は末明の肩までしかない。
涼香の頭は、ようやく末明の目線あたりである。
それがゆえに、発育が違うのだろうが……。
ぱん、と軽い発砲音が聞こえた。
「キタ――――――――！」
涼香が興奮していた。
「……本当に来たのね……」
「……考えるのと、実際にやるのとは全然違うね……」
優奈と末明は少し引いていた。
「当の言い出しが何を言う」
「いや、……涼香は幻想投影（ホログラフィック）が使えるから逃げられるけど……
こっちにはないんだよ？がんばっても偽造電磁砲（レールガン・カンファレイジ）が

×2しかないんだよ」
「私が、その偽造電磁砲使うこと前提なのね……」
偽造電磁砲というのは、もともと蔑称でもともとの名前は誘導電磁加速砲（コイル

ガン）である。一度、前に使った後、常盤台の超電磁砲と能力が似ているから、劣

化超電磁砲やら偽電磁砲やらと言われ続けていた。
ところが、末明は開き直って自ら偽造電磁砲を名乗るようにしたのだ。そうしたら

、他の人に馴染んだのだ。
「と、いうわけで相手が電撃使いではないことを祈りつつ、幻想投影をよろしく」
「……うぅぅ……わかったよ」

と涼香はしぶしぶ了承した。
「というわけで、“常盤台の超電磁砲”に見せてみて」
「なに？“光が丘の偽造電磁砲”を広めるんじゃないの？」
「虎の威を借る狐が目的なのね」
いつの間にか優奈はシンパシーの応用を使っていた。
「……いっちゃったか～……」
涼香が渋い顔をする。でも、涼香は一度約束したことはほとんど守る。例外はそれ

なりにある。
「……！おいそこ！うるさいぞ！」
「うるさいのはそっちですのなのね！」
末明が超電磁砲をセレクトしたのだから、優奈は“身も心も再起不能にする風紀委

員”のまねをする。けど、それをセレクトしていないから、元の姿のままだ。
「レ、超電磁砲！？」
しっかりと、末明のほうは設定できているらしい。
そこにはビリビリ空気を帯電させ、放電もさせている超電磁砲の姿があった。
無論、これは、末明である。
「な、なんだこれは！？」
周りにたくさんの超電磁砲を見せかけているのだ。
ううむ。超電磁砲の能力がここまで効くとは主はなかったな。
「き、消えた！？」
ふっと、幻想投影が解除される。
ズドーーーーーンと一つつのコイルガンが発射された。
そのまま犯人の持っていた拳銃に命中した。その拳銃にはぽっかりと穴が開いてい

た。
「っひ！」
「だらしねえやつ……」
お決まりの二人目が末明の後ろに現れた。
ズドーーーンと二人目がしゃべり終えるまでにもう一発が発射された。
ちなみにだが、末明の偽造電磁砲は1分間に1．5発しか発射できない。
では、誰が打ったのか。
もちろん。
「ぐえ！」
首。気道に直撃したその砲弾？はもう一人を気絶させるに十分だった。
どさっと壁に打ち付けられた後、床に倒れこんだ。
犯人グループは二人。
いや、外にもう一人離脱用がいたが、駆け込んだ後、末明の回し蹴りで倒れた。

偽造電磁砲（コイルガン）と幻想投影（ホノグラフ）（後書き）

もしかすると、次は花天さんの岡富君と同じ話になるかもです。

偽造電磁砲（コイルガン）

常盤台のエース、御坂美琴を目標にした涼香が編み出した強力な電磁加速砲。

速射能力、射程、弾速どれをとっても超電磁砲に及ばない。

速射能力１．５発／分

射程２７Ｍ

弾速マッハ２．３２

幻想投影（ホノグラフ）

相手にそう、見せかけるだけのもの。正真正銘のホノグラフィ。レベル２だから、近づけば、すぐわかる。

出力アップ

睦月優奈の朝は遅い。
とにかく、遅い。
原因は夜まで勉強をやっているせいでもある。トップ校を狙っているため。
「眠いのね」
そして、今日も、一時間目からぐったりとしているのだった。
「ゆーうーなー♪」
と言って、ぐったりとしている優奈を椅子越しに涼香が抱きついてきた。
間違いなく、男子から羨ましく感じてるんだろうなぁ。
なぜって、涼香はプロモーションがいい方なのだ。それほど大きいわけでもなく、控えめでもない。
いわゆる、平均的なのだ。
そして、一部の人から見ると、間違いなく、あの光景に見えることだろう。
「涼香、辞めるのね～」
優奈が暴れだすと、
「この、悪い子ちゃんめ～」
といって、さらに優奈に抱きついてきた。
うん。確かに羨ましい。え？作者が言うなって？う～ん、確かにそうだけど……。
「わかったのね。いい子にするから、離すのね～」
「っち」
「なんか、聞いちゃいけないような声を聞いたような気がするのね……」
「な～んのことかしらねぇ～？」
「その時点で、怪しいのね」

そういうと、また、優奈はぐたーとなった。
「今日はどうかしたの？」
あまりにも、優奈が元気ないため、涼香は本気で心配になったようだ。
「ううん、何にもないのね～」
というと、優奈はすやすやと寝てしまった。
一応、昼休み。
だから、自分の机の上で寝るのは全く、問題はない。
そして、その後ろの席に座って、その光景を眺めていた。

＊　＊　＊

「体力全開なのね～」
昼休み中、ずっと寝てた優奈は終業のベルが鳴った後には元気になっていた。
学校の校門の近くでいつものように末明が待っていた。
「お～い、二人とも～」
末明は、手を振っていた。
優奈は、走った。
意外と、早い。
といっても、それほど速いのではない。彼女の性格と、体型から想像するより早いという意味である。

「どうしたのー？」
「なんでもないよ？」
……。
「意味もなく、大声で呼ばないでねなのね」
「了解した」
と言って、くるりと向きを変えた。
そのあとを、涼香と優奈はついて行った。
そうして、涼香は思った。
（私の台詞は！？）
なむ。
そして、ついた場所は、駅前のデパートであった。
「で、ここで何買うの？」
と涼香が聞いた。
（涼香が、あっち系のものを買わないようにしなければならないのね……）
と一人優奈が考えていた。
「ただ、買い物」
「その、内容を聞いてるんだけど」
「あ、言い忘れてたね」
末明は笑った。
ははははと言った後、
「ちょっと、パソコンをね」
「「へー……ってえーーーー！？」
パソコンをコンビニでお菓子を買うつもりで買う末明。恐るべし。
「いや、嘘だよ？パソコンの外部機器……んとね、外部式のドライブだよ？」
「ちょ、驚かさないでよ」
「全く……」
そう言って、涼香は汗をぬぐいた。
もっとも、炎天下の中、ずっと立ちっぱなしなのは確かにつらい。

「……どったの？優奈」
「ふぇ？いや、私もパソコンほしいなぁ……って」
歩きながら、ぼそぼそと呟く、優奈を見て涼香が聞いたらそう答えた。
「そっか、優奈、そんなにお金ないもんね」
と言って、涼香は優奈の頭をなでた。
「旧式で廃棄処分する予定のものでしたら、格安でお渡ししますが？」
と、突然、優奈の後ろから声がかけられた。
そこにはどこかで見たことがあるような顔だった。
これが、出力強化、倉田綾乃と優奈たちの出会いだった。

出力アップ（後書き）

「で、岡富君との出会いはないのね」

うん。そこら辺は、調整中。

「なんか、向こうの人と出会ったら、逃げろとか言われてるけど？」

大丈夫……だと思う。

「大丈夫って……不安があるのね」

ま、大丈夫でしょ。主人公補正もあるんだし。

「どこのはやてだ」

大日本帝国陸軍の主力戦闘機。

「はやて違いなのね」

じゃあ、八神……

「それも違うのね！」

って、コイルガンの砲身をこっちに向けないで！

「問答無用なのね！フォイエル（撃て）！」

パソコン

「格安？」

優奈が首をかしげた。

「そういえば、あなた誰？」

涼香が聞いた。

「私は、光が丘中学一年の倉田綾乃（くらたあやの）です」

綾乃は、すこし、縮まりながら聞いた。

風紀委員が目の前にいるからなのかもしれない。

「綾乃さんはこのデパートの店員さんじゃ……ないんだよね？」

「はい、そうです。私は、ただ、この近くを通りがかっただけなのです……」

と、綾乃はおずおずといった。

綾乃によると、この旧型パソコンはどうやら、綾乃自身が以前、使用していたものらしくすでに使用していないから、殆ど、ただでくれるらしい。

「でも、なんで“格安”なのさ？」

末明が聞いた。

「え、っと。そ、送料です」

どうやら郵送してくれるらしい。

以下似たような会話なので割愛。

綾乃を含めた優奈たち四人は、駅前の道の移動式クレープ屋でクレ

ープを買っていた。

「なにそれ？」

末明の目線は、涼香のクレープに注がれていた。

「なんで、クレープに納豆が入ってるのよ……」

「え？なんかおいしそうじゃない？」

「いつも思うけど、涼香の食べるものっていつも何か変なのね」

「変とはなによ」

「あ、あの、私の分も買わせて……」

四人で、わいわいしていた。

結局、優奈はプリンが入ったクレープを、
末明は小豆と抹茶クリームのクレープを
綾乃はシンプルなバニラアイスのみのクレープを食べていた。

ん？涼香？涼香は一番早くに食べ終わっていた。

「あんまり、おいしくなかったなぁ……」

どうやら、吐くほどではないが、まずいものであったらしい。

まあ、合わないだろうな。

「そりゃ、そうなのね。ただでさえ、納豆はねばねばしてるのね」

口にプリンのかけらをつけながら優奈が言った。

「優奈、口にプリンがついてるよ」

「ん！？」

優奈はようやく気づき、プリンを取った。

パソコン（後書き）

一度、ミスって、全部消してしまったｏｒｚ

書き直してみたら、こうなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0533l/

とある奇跡の能力共有

2010年10月17日03時37分発行